

協働学習における授業改善の経緯と教師の役割

— 共修授業「グローバルコミュニケーション」

「日本事情グローバル」の授業実践報告から —

足立 祐子・池田 英喜*

新潟大学グローバル教育センター*

近年、多様な文化背景を持つ留学生と日本人が共に学ぶ国際共修授業が多くの大学で盛んに開講されている。カリキュラム設計の専門家たちは、共修授業にとって重要なのは、授業内言語を英語に変える、異なる文化背景の学生たちを集めて授業を行うといった表面的なことではなく、授業の内容、方法、評価について吟味することだと報告する。本稿では、教員二名が2002年から長期にわたって実施している共修授業について考察する。まず、その授業の開講形態と活動内容の推移を説明し、どのような試行錯誤や話し合いをもって授業改善を続けてきたかについて、1. 互恵的な相互依存関係、2. 対面での促進的相互交流、3. 課題達成における個人の責任の自覚、4. 社会的技能の意識化、5. 将来の実行性向上のための協働的活動評価、という観点から分析する。最後に今後積極的に取り組まなければならない課題について述べる。

キーワード：協働学習，共修授業，社会的技能，互恵的相互依存関係，促進的相互交流

1. はじめに

筆者たちは、言語や文化的背景の異なる学生同士が、問題解決や成果発表をめざし、協働で活動する授業を「共修授業」と位置づけている。近年、多様な文化背景を持つ留学生と日本人学生が共に学ぶ「国際共修」¹型の新しい授業が盛んに取り沙汰されている中、本稿でとりあげる授業実践は決して新しいものではなく、本学で20年以上に渡って開講されてきたものである。

本稿では、筆者たちによる国際共修型授業の、開講形態と活動内容の推移に焦点を当て述べる。さらに、学生参加型の協働学習(collaborative learning)における教師の役割について、筆者たちの内省から考える。とりあげる授業は、本学の1,2年生の学部学生を対象としたGコード科目「グローバルコミュニケーション(前・異文化間コミュニケーション)」(新潟大学個性化科目)および「日本事情グローバル(前・日本事情人文系)」(留学生基本科目)である。

坂本(2008)によると、「協働学習」は、学習活動

に「協働」を用いる学習形態であり、「協働」するための能力や学習者間の「協働」関係の形成を志向する学習も含んでいるとしている。本稿では「比較的少人数のグループの中で相互に協力し合いながら、与えられた課題の達成をめざす学習」と定義する。グループの成員が学習を最大限に高めるために共に学ぶグループ学習との違いは、グループのメンバーが相互に依存しあう関係があり、課題達成のために各メンバーが担った役割に責任を持ち、だれもがグループのために貢献できる、あるいはしなければならぬ点にある。また、筆者たちが特に重視している点は、1. 互いを知り信頼しあい、2. 正確かつ明瞭に意思の疎通を図り、3. 互いを受容し助けあい、4. 対立を建設的に解決できるといった「社会的技能」(D.W.ジョンソン他2001: 77-78)の育成と活用である。グローバル化が進む現代社会において、個人がさまざまな立場でその専門性を活かしながら協力連携しなければならぬ機会が増加し、その際に「社会的技能」が大きな役割を果たすと

考える。よって、学生たちが協働学習を通して対人関係や小集団における「社会的技能」の重要性を認識できるようにすることも、本授業のめざす点である。

2. 授業開設の経緯

とりあげる授業は、1993年に、異文化理解をめざし開講され、ディスカッションを主体にした、留学生と日本人学生の合同授業がそのはじまりである。この授業は、当時本学人文学部所属であった土屋千尋氏（以下、土屋氏）が企画し開講したものである。特に1997年からは、土屋氏が代表を務める科研費の研究対象となり、秋田大学、信州大学、新潟大学、弘前大学、福井大学（あいうえお順）の5大学間での合同授業として試行された。1990年後半頃から、授業の参加者は留学生と日本人学生だけでなく、帰国子女、在日外国人子弟、社会人卒の入学者など、クラス自体がすでに多文化性を包含しはじめていた。そこで土屋氏はこの授業を、多文化共生教育を目的とする「多文化クラス」と名づけ、教育方法、教育効果、問題点、また地域との相互交流の模索などを課題として挙げていた。授業受講前、授業受講後に課した参加者へのアンケート結果について、土屋氏は次のように報告している。「受講前に学生たちが授業に期待することは、「日本語（言語）学習」「親密度」「交流」「理解」などであるが、これが授業後には「役割分担」「時間厳守」「協力」「約束の履行」などが重要であると感じているように変化した」（土屋1998）。つまり、学生たちは、共修授業に対して言語学習や相互理解といったことを受講前には期待していたが、受講後にはグループ員としての自分の役割を理解した上での行動や、課題遂行のための時間管理・協力がいかに重要かという認識へと変化してきたことが示された。土屋氏が開講したこの授業は、1997年から足立が、1999年からはさらに池田も一部加わって進められた。土屋氏が本学から転出後の2000年以降は足立が、2002年以降は足立、池田の二人が試行錯誤を重ね、現在に至っている。

3. 授業の開講形態とグループ活動の内容

3.1. 開講形態について

①2002年Ⅰ学期²⁾～2007年Ⅱ学期（Ⅱ学期のみの年1回開講）

主に学部1、2年生対象のⅡ学期の授業として年1回開講した。受講定員は留学生（または外国にルーツをもつ学生、以下留学生と略す）20名とそれ以外の学

生（主に日本で育ち日本語が第一言語の学生、以下日本人学生と略す）20名で、グループに分かれて課題を達成するという活動を実施した。異文化コミュニケーショントレーニングで使われるゲームや話題をとりあげ、多文化的背景を持つ人々とさまざまな形でコミュニケーションをとりながら課題をこなしていくという形式で授業を進めた。授業期間の後半には授業活動の1部として1泊2日の合宿を実施し、グループごとに作品制作をおこなった。

②2008年Ⅰ学期～2013年Ⅱ学期（年2回開講に変更）

①と同様の授業内容（合宿を含む）をⅠ学期、Ⅱ学期の年2回開講し、受講機会を増やした。学生が重複して授業を受講することができないようにして、合計80名の学生が本授業を受けられるようにした。

③2014年Ⅰ学期～2015年Ⅱ学期（宿泊合宿を日帰り合宿に変更）

授業科目実施経費として宿泊合宿の交通費を計上してきたが、交通費の確保が困難になったため、週末の土曜・日曜に、学生たちが大学に来て、合宿と同じ内容でグループ活動を実施する形態に変更した。その他は②と同じ形態で実施した。2014年Ⅰ学期には、今まで各学期とも40名の定員で実施していたものを、60名の定員（留学生30名、日本人学生30名）にし、年に計120名の学生が本授業を受けられるようにした。授業科目名も、異文化コミュニケーションからグローバルコミュニケーションに変更した。

④2017年Ⅰ学期（クォーター制導入のため授業期間の短縮。15週間から8週間へ。）

授業回数削減（15回から8回）以外、基本的には③と同じ形態で授業を実施した。ただし、4つのターム中、第1タームと第3タームのみを実施することを計画した。

3.2. グループ活動の内容について

① 2002年～2007年

土屋氏の活動内容をほぼ引き継いだ。中心的な活動は、あるテーマに基づきグループ作品を制作することである。合宿期間中には特に十分な話し合いと制作のための時間を与え、グループとして活動しやすい環境を整えた。2007年からはさらに課題を二つ与え、異なる活動を同じ時間内で行うような活動内容にした。

② 2008年～2014年

2008年に、ビデオ作品の制作を中心的な活動として位置づけた。ただ、グループ内に創作活動が得意な学生がいる場合、その学生のアイデアだけで作品が制作され、十分な話し合いなどの協働作業が行われないケ

ースが出てきたため、作品制作に加えて、グループ全員の積極的な協力が求められる活動を加えた。

③ 2015年～

活動内容はほぼ②と同じであるが、新たに協力が求められる活動として、グループ全員が一緒に行うパフォーマンス（体操やダンス）に変更した。素材には、ラジオ体操、ピンクレディーの UFO の振り付け、千本桜の YouTube 動画などを採用した。

④ 2016年～2017年

全員がそろって行うパフォーマンスの指導等のために、専門家（スポーツインストラクター）が授業に参画できるように内容を一部変更した。また、その専門家にグループ成果の評価も依頼した。

4. 授業内容の改善について

4.1. 改善意図

3.1. で述べた開講形態の変化に関しては、筆者たちの授業改善に向けての話し合い、出来る限り多くの学生に「社会的技能」を意識して欲しいとの思いから、II 学期だけだった授業を I 学期にも開講したり、各期の受講定員数を増やしたりした点が一番に挙げられる。筆者たちが受講者数を増加した一番の理由は、2008 年以降の学生たちの変化があげられる。宮木（2013）では、1998 年から 2011 年の意識調査で「多少の自分の意見を曲げて、友人と争うのは避けたい」、「友人との話で『適当に話しを合わせている』ことが多い」などの割合が増加し、友人との表面的な同調傾向を指摘している。また、渋川他（2010）に近年の「悩めない」大学生として「状況依存的で多面的な自己の在り方や人格の未熟さ、体験・言語化の難しさ」をあげている。筆者たちが接している学生たちも、渋川他の指摘するような学生が増加してきたように感じられ、他者との関わりが希薄な様子が伺えるようになった。このような学生たちの変化に対応すべく受講者数の増加をはかった。それ以外は外的な影響（例えば交通費が確保できない等）で仕方なく開講形態を変えた。

ここでは、授業内容について担当教員である筆者たちがどのような意図で改善を進めたのかについて、1. 互恵的な相互依存関係、2. 対面での促進的相互交流、3. 課題達成における個人の責任の自覚、4. 社会的技能（個人や小集団との協調的技術）の意識化、5. 将来の実効性向上のための協働的活動評価（D.W.ジョンソン他 2001 : 71）の 5 点にしぼり述べる。

4.2. 互恵的な相互依存関係と対面での促進的相互交流

本授業では留学生と日本人学生が同数になるようにグループを作った。1 期 15 週間の期内に 3 回程度のグループ分けを教師主導で行った。その際、男女、年齢、所属学部など、できるだけ多様な関わりができるようにしたうえで、授業前半は異文化コミュニケーショントレーニングの手法を活用し³⁾、単に「留学生と日本人学生」ではなく、「考え方が異なる個人の集合体」がグループであると意識させるようにした。後半はそのグループで作品制作を行わせた。異文化コミュニケーショントレーニングのゲームについては、「バーンガ」や「ワニの河」⁴⁾ などを使ったが、学生たちの反応を観察した上で、作品制作のさまざまなプロセスに直結する活動へと変えていった。現在ではおよそ以下の 4 種類を用意している。

① 他己紹介：

自己紹介に対して他己紹介という名前がついている。2 人組になり、5～10 分程度二人で自由にお互いを紹介しあう。その後、全員に向けてお互いを制限時間(30 秒)つきで紹介する。

② 日本語以外での自己紹介：

日本人学生と留学生が 2 人 1 組でペアになり、ペアの留学生の言語を使って日本人学生が自己紹介をする。日本人学生が留学生の母語で自己紹介が出来るよう、留学生は日本人学生を指導する役目を担う。留学生から教えてもらった日本人学生は、みんなの前でペアの留学生の母語による自己紹介をする。

③ エアーなわとび：

5～6 人のグループになり、実際には縄を用いず、大縄跳びをしている動きを演じる。全員が画面に写りこんだ、1 分程度のビデオ作品にする。

④ 静止画づくり：

与えられたテーマで、グループ全員（5～6 人）が写りこんだ静止画をデジタルカメラで撮る。一種のドラマ・エデュケーション⁵⁾の技法を用いている。作品は、グループ以外の人も交え、テーマどおりの表現であるかどうかを話し合い、評価する。

これらの活動は、この授業における学生たちのウォーミングアップとなり、さらに互恵的な相互依存関係を作っていく。特に、促進的相互交流という意味では、必要であれば担当教員がグループ間で競わせる場面を作り、グループの結束性を高める工夫をする。また課題遂行の体験を通して、学生たちは授業の目的につい

て考えることになる。一方、筆者たちは、授業を観察しながら、活動を選択し、グループ設定や時間配分などを考える。その際、教員の一人が活動の進行役、他方が学生たちの観察役（モニター役）となって動く。

4.3. 課題達成における個人の責任の自覚

筆者たちは、グループ評価に関連づけ、課題達成における個人の責任の自覚を促すよう授業を展開している。そのため、第一回目の授業で授業概要を説明する際に、評価についてはグループ単位でなされる（グループのメンバーはすべて同じ評価になる）ことが提示され、各人がグループに貢献しなければ結果は出ないと告げる。また、集合時間などを守ることにしても、グループ単位での行動を徹底している。例えば、グループのメンバーが一人遅刻すれば、グループの作業をスタートさせず、他のグループに後れを取ってしまうようにしている。土屋氏の実践でも、合宿中にグループ作業が滞るように意図的に課題を変更するなどして、グループ内で、「もめ事が起こる」ような仕掛けを工夫していた⁶⁾。本授業では、時間の管理⁷⁾に限り、グループ全体の作業と関連させることで、個人の責任の自覚を促すようにしている。

4.4. 社会的技能(個人や小集団との協調的技術)の意識化

3のグループ活動の内容についての部分でも述べたが、2002年からの足立、池田の二人体制の授業内で、課題遂行のための作業を素早く進められるグループと、著しく遅いグループが存在することに気付いた。素早く進められるグループをよく観察すると、グループ内に一人のアイデアマンがおり、その学生がほとんどすべてを一人で決めていくグループであった。また、作業が遅いグループは、グループ内での合意のもとに、作業を進めて行かなければならないという自覚が薄い傾向が認められた。前者のケースを予防するため、2007年からさまざまな試みをはじめた。安定した授業形式になったのは、活動にダンスを取り入れてからである。特に2015年のⅡ学期からはエアロビクスを課題の一つにし、専門家であるスポーツインストラクターの参画導入を始めた。この外部インストラクターの導入は、学生が協働活動に対して強い動機を持つことにつながった。つまり専門家が参画することで、成果作成という活動自体にリアリティが伴ったのである。インストラクターは、基本的なステップを的確に指導し、全員がそろってダンスパフォーマンスができるよう、その都度的確な助言を与える。その助言に従って全員が協

力して練習することで、成果が目に見える形で現れた。一方で筆者たちは、活動外の関連部分において助言を与えるよう工夫した。それは、グループ全体の「動きをそろえる」ためには、動きの悪い者に合わせる工夫が必要なこと、モニター役がグループ全体を見渡し確認しなければならないことなどであった。また、グループとして動きがそろっているように見せるためには、どのようなコミュニケーションをはかるべきかについても必要があれば助言した。筆者たちは、外部インストラクターと連携して助言を与えることで、学生たちが協働作業を総合的に捉えられることを意識した。

4.5. 将来の実効性向上のための協働的活動評価

まず、課題の作品を繰り返し再生できるように、作品すべてをビデオで撮影するようにした。これは自分たちの作品制作意図が明確に作品に表れているかどうかを、モニターするために必要不可欠であると考えている。また、制作途中の作品をグループ外の学生にも見せて、グループ間でお互いにアドバイスを与え合える時間を設けるなどとした。個々の助言はメモ（ポストイットなど）に書いて、後からグループ内で共有できるようにした。受講定員を増やしてからは、授業時間内に全員で途中成果を見ることが困難になったため、2つのグループがお互いに制作途中の作品を見合せて、それぞれが助言を与え合うという方法に変えた。さらに、評価では改善すべき点だけでなく、優れた点も同時にを見つけることを学生たちに促した。

5. 協働学習における教師の役割

渡部（2011）では、授業で活動する際に教師が注意すべきこととして、1.活動する目的や場面、学生数、学生の経験の有無、時間、活動の場所の広さなどを十分考慮して、いろいろある活動を適切に選択する、2.学生に対してどんな働きかけをすることで学生の活動動機を高めることができるか工夫する、3.グルーピング、活動の組み合わせ、時間配分など柔軟に運用する、4.活動を終えた後で次回以降にどのような改善をすべきか、教師が省察を行う、などを強調している。また、活用できる活動の豊かなストックを持つこと、その豊かなストックを柔軟に運用できること、教師が表現者として自分の特性について自覚していることの重要性を強調している。これらをもとに本授業を振り返ってみると、まず担当教員が二人であることが大きいと考える。渡部は、技法（本稿では活動の内容や進め方など）について知るのはさほど難しいことではなく、重

要なのは効果的に運用できることであると繰り返し強調している。活動を効果的に運用するためには、試行錯誤を繰り返し、その結果を内省しながら次に改良を加えていくというPDCAサイクルの手法が求められるが、二人の担当教員がいることで、15回(4学期制の現在は8回)の授業内のいろいろな時点で二人の異なる視点からの感想を述べあい、評価をし、改善策を導入することができた。活動の種類を豊富にストックするという点でも、日ごろから教員同士で興味のあることを話し合ったり、ワークショップに参加したりすることで情報共有がなされている。授業の進行の際も、学生を観察する際も、二人が交互に役割を変えることで、一人の教員が気づけなかった部分に、もう一人の教員が気づくことができた。さらに、2015年のII学期からは外部の指導者の参画により、これまでとは異なる視点を持って授業に参加できた。

協働学習において、教師は常に黒子であり、活動が滞ってきた時に具体的に有効な助言を与え、軌道修正できるかが重要な役割として挙げられる。授業デザインについても、授業開始前に全体デザインを決め、その後の学生の状況を見ながら、部分デザインの修正をし、最終的なデザイン決定が求められる。

本授業の場合、長年の経験から、ある程度の安定した活動内容にできてきていると筆者たちは実感している。まず、2回程度のウォーミングアップ活動をグループで行い、互恵的な相互依存関係を構築し、対面での促進的相互交流を進める雰囲気を作り出す。そのうえで、4名程度のグループで、与えられた課題での創造性のある作品制作と、協調性が求められるエアロビクスダンスのパフォーマンスを行うという流れである。

課題の1つである映像作品制作では、グループ内でのコミュニケーションが必要になるような工夫を加えた。撮影開始から終了まで、カメラに触れることを一切禁止したのである。カメラ位置の移動、カット割り、ズームイン、ズームアウトなどは、撮影では当たり前の技法だが、これら一切の使用を禁止したことで、自分たちの作りたい作品を作るためには、どのような工夫が出来るか、あるいは必要かを、グループ内で話し合わざるを得なくなった。つまり、制約を課せられたことで、自分たちの伝えたい作品づくりに真剣に向き合うことになったと同時に、そのための話し合いに集中できるような環境が整ったと考えている⁹⁾。

6. 今後の課題

6.1. 本授業の評価について

筆者たちは本授業を大学1年生対象の必須授業として位置づけたいという希望がある。その一番の理由は、最近の学生たちは、対面でのコミュニケーションがあまり得意でない傾向がみられるからである。加えてグローバル化が急速に進み、人の移動が頻繁にある現代において、時間的制約もある仕事の場面などで、異なる意見を持つ人間がコミュニケーションを通して妥協しながら同じ目標に向かって進む、グループの一員として各自がそれぞれの役割や仕事を責任を持って果たす、またこれらを意識しながら協働作業ができるといった、社会的技能を持った人材を社会が求めているからである。筆者たちの授業を受講した学生たちの気づき、そして別の局面ではその気づきが行動につながるものが、本授業の意義であると考ええる。ただ、これを評価することは非常に難しい。現時点では、成果物のルーブリック評価、及び活動後の学生たちの自己評価の両方からの評価を実施しているが、そもそも本授業と数値的な評価自体がなじまないと筆者たちは考えている。学生たちが本授業のねらいどおり熱心に活動に取り組み、社会的技能を意識でき、さらに活動後、活動当事者から少し距離を置いた第三者的な視点で自己を内省できれば、それで本授業は目的が達成できたとと言える。しかし、さまざまな学生参加型の大学授業の研究が進められている中であって、筆者たちは、今後も評価について模索しながら進めていく考えである。

6.2. 合宿について

何ら実証はされていないが、他大学でも本授業のような実践をしている教員の声を聞くと、一定期間寝食をとともにする、いわゆる合宿の重要性が強調されている。担当教員たちは経験的に合宿を通して学生の意欲が高まることを認識しているようであるが⁹⁾、交通費など経済的な問題があり、本授業では2014年から実施できていない¹⁰⁾。筆者たちは、学生たちの自己評価の分析から、この変化を今後見極めていきたいが、現時点では、合宿の代わりとなる協働作業の際の工夫改善が必要になってきていると考える。

6.3. 受講学生の質の変化

本稿は担当教員である筆者たちの目から見た分析であるが、学生の質が最近変化してきているように感じている。特に、これまで感じてきた留学生と日本人学生の意識の違いを、ここ数年はあまり感じなくなってきたことである。たとえば、かつては欧米からの留学

生の場合、自己責任観が強く、自分の意見をはっきり言う傾向があり、それが日本人学生やアジアからの留学生にとっていい刺激になることが多かった。しかし、最近ではほとんどの学生があまり自己主張をせず、おとなしく従順で個性的ではなくなっているように思える。この点はグループ制作作品に明確に現れている。作品自体が学生たち個人の著作物で、かつ映像に映り込んでいたりするので、個人情報保護の観点からこの場に示すことはできないが、今後、コード分析など別の方法で研究し、示せばと思うている。ここで言えることは、受講学生に変化があるのであれば、授業のデザインもまたそれに対応して変えていかなければならないという点である。おそらく、その鍵となるのは、より現実に近いものを協働作業の課題として提示すること、さらに、土屋氏が試みようとした地域との相互交流の試みなどだろう。開かれた大学として、また新潟大学ならではの特徴ある授業の一つとしても、今後さらに改善を進めることが求められる。

- 1) グローバル人材育成を教育目的に掲げる高等教育機関で、留学生と日本人学生が共に学ぶ「共修」の授業を指す。2000年代に入り、立命館大学、東北大学、北海道大学等で組織的、制度的に進められている。
- 2) あくまで足立・池田の二人がともに関わった授業についての報告であるため、2002年以降からを本稿の考察対象とした。
- 3) 担当教員は二人とも2002年当時、南山大学で実施されていた名古屋異文化コミュニケーションセミナーに参加し、そこで実際に体験しているの、ゲームを円滑に活用できた。
- 4) トランプゲームや話し合いなどによって多様性を確認するために使われるゲーム
- 5) ドラマ(演劇)の手法を用いて体験的に行われる教育プログラム。グループで活動をする中で、価値観の違いを尊重する対話的コミュニケーションの方法や効果的なプレゼンテーションの方法を体験的に学ぶ。1970年代からイギリスを中心とするヨーロッパ地区等で青少年の教育支援からはじまったと言われている。
- 6) 2009年に放送されたNHK特集「宇宙飛行士はこうして生まれた—密着最終選抜試験」の番組でもチームのリーダーシップを見るために課題を途中で変更しチームのメンバーがもめ事を起こすような環境を意図的に作っていた。
<https://www.nhk-ondemand.jp/goods/G2011034652SA000/?spg=P200900047300000>
- 7) 時間に関する考えは文化的な差も生じるため、留学生にとっては日本社会のルールを考える機会にもなり、必要な場合は日本文化理解の説明をつけ加えることがある。日本人学生にとってはビジネスシーンでの時間厳守について体験を通して知る機会にもなる。
- 8) 自由度に制限をかけることには賛否両論があるが、本授業

の時間的制約を考え現在のところはこの形式で授業を実施している。

9) 学生が合宿を通して意欲的になる理由として、1.合宿という特別な空間での活動であるため、活動そのものに集中できること、2.寝食を共にすることで相互依存関係、信頼関係が強化される、などが挙げられる。

10) 合宿を実施していた時は、合宿場所は新潟県青少年自然の家など宿泊費のかからないところでおこなってきた。参加学生は食費とシーツ代を負担し、交通費としてのバス代を大学で負担していた。

参考文献

- D. W. ジョンソン, R. T. ジョンソン, K. A. スミス (2001/2003) 『学生参加型の大学授業』玉川大学出版部, 東京
- 宮木由貴子 (2013) 「若年層の友人関係意識—通信環境の変化と友人関係が変わったもの・変わらないもの」Life Design REPORT(205): 4-15, 第一生命経済研究所ライフデザイン本部
- 坂本旬 (2008) 『「協働学習」とは何か』『生涯学習とキャリアデザイン』5: 4—57, 法政大学キャリアデザイン学会
- 渋川瑠衣・松下姫歌 (2010) 「大学生における自己の変動性・多面性の概念について—学生相談における臨床的理解と意識の視点から—」広島大学心理学研究 第10号: 171-183
- 土屋千尋 (1998) 平成9年科学研究費補助金基盤研究(c)研究成果中間報告書: 92-93
- 渡部淳、獲得型教育研究会編 (2011) 『学びへのウォーミングアップ70の技法』旬報社, 東京

SUMMARY

Recently, many mixed-cultural classes, in which foreign students and Japanese students are learning together, are seen in university lectures. However, the curriculum experts say that having foreign students and Japanese students in the same class using English is not good enough at all. Class-management, the method of teaching and class evaluations are more important elements for university lectures in this globalized era. In this article, we discuss how we have modified the lessons we have given in the past 15 years towards the globalized world. We especially focus on 1. mutual reliance within the group activity, 2. face-to-face communication in a group, 3. the individual responsibility towards the goal as a group, 4. consciousness of social communication skills, 5. evaluation of working together within a group.

2017年10月24日受理

† Yuko Adachi, Hideki Ikeda 'The Process of Improving Lessons and the Teachers' Role in Active Learning Classes, Global Education Center Niigata University 8050, Ikarashi 2no-cho, Niigata City, Niigata ,950-2181 Japan